上田繊維專門學校

千曲會報

社團法人千曲會　第三十號　昭和十八年七月二十五日

山崎部隊長を憶ふ

群馬縣立利根農林學校長　田口富五郎（繊九）

○

上州の山地奥利根に來て奇異に感じたことの中に、こんな山奥だが沼田町を中心として何となく明るく感ずることと、又現下の世局に重要な椅子を持つて、國務に奔走されてゐる武人、政治家の群を拔いて多いことである。そして一般に物識りの多いこと、私は時折り邊鄙な部落に論語を中心とする會があつたり、老子や古典の研究會があつて、夜を徹して快談したと云ふ話をとき〴〵聞くのである。又白髪の老農人達がドイツ語やフランス語を講釋する場面に出會つたことが再々ある。流石に舊藩沼田城下の老臣達が今後の日本興隆には青年を教育せねばならぬとして、早くから育材館と稱する教育施設を設けて人材の教養につとめた卓見が實を結んでゐるのであると感ぜしめられる。維新の當時上州の平坦地では對外貿易に備へて速成的な草木作物が一攫千金を夢みて次から次へと栽植されてゆく時に、奥利根では百年の大計である樹木が谷から谷へと人知れず植栽され、手入されてゐた。そう考へて來るとこんな山奥に縣立中學校や農林學校が肩を並べて設立されてあるのも決して偶然でないことに氣附くのである。今奥利根には二抱へ以上もある大木が森々として繁り谷を埋めて數里見透しのつかぬ場所がいくらでもあり、時局の要請に應へようとして我々の手を待つてゐる。奥利根は自らは語らないが無限の力を藏してゐると評する場所である。

又此頃沼田に香坡園と云ふ公園樣の場所が出來た。之は幕末の勤皇家橋本香坡先生の生誕の地を當地の有力者達が人手に渡つてゐた土地を買收して整地した處であつて、園の中程に先生の有名な不二岳の詩碑が天空に聳えてゐる。不二岳の詩は幕末畏れ多くも國體を明徴にし、近海に迫る米英に對し、米英的人生觀の大和民族と氷炭相容れざるのみか、米英的民族觀念は惡鬼の思想なりとし、我等は立つて之を打倒せざるべからざることを國民に教へ、先生自ら陣頭に立つて米英擊滅に奔走せらるゝ時の作にして、詩中「勤皇即米英打倒」を叫んで居られる。現下の國民たるもの誰かその達識、憂國の至情に感激せぬものがあらうか。

○

軍神山崎保代大佐はこんな環境の土地に滿三ヶ年、この地方の子弟教養のために全力を捧げられた。そして先生が軍隊外に御勤務になつて生活されたのは恐らく此處だけだつたと思はれる。

先生が縣校の配屬將校として御勤務中私は一教諭として机をならべ御指導を仰いだこともあり、後松本の聯隊に御轉勤の時私も長野の上高非蠶業學校に轉任になつて御手紙を頂いてお遣ひに行つたこともあり、生徒をつれて營內でいろ〳〵お話を具さに承つたこともあつて私としては忘れられない方であつた。お別れして後再び私の茲の古巣へ轉ずることになつた誠に淺からぬ因緣であると思ふ。

山崎先生がアッツ島で玉碎せらるゝや各方面から先生のお話や逸話等について聞かれるのであるが、誠に困ることに先生に限つて、逸話がない。唯あるものは「語らないが、無限の力を持つて居らるゝ人だ」と云ふ感じだけであつた。この間大本營の發表後早速職員と先生の舊教へ子達に高田市の留守宅へお見舞に行つて貰つた時、奥さんが主人は時々「利根はよい所でした、生徒も本當によかつた」と再三申して居りましたと云ふことを聞かされました。私は山崎先生と奥利根には大きな關係があり、先生自身も御在任中深く感ずるものがあつたように思はれるのである。

山崎部隊が敵陣に、最後の突撃を敢行するときのあの從容さ、十倍の敵を相手に善戰健闘十八日、殆ど倒れ最後に殘つた雜役に服する人達を入れて百數十名が玉碎に先つて打電した暗號電報に一語の誤りなき沈勇、私はやつぱり山崎先生だなと思つた。斯樣の大事に際會しては平常の肚がやはり物を云ふのであらう。之に反して敵側は主要陣地動搖し、救援を求むるに急にして、暗號電報にて打電出來ず平常語と變り、之が日本に聽取されて陣中の模樣が解つたそうである。

職員室の山崎先生は大マカであつたが仕事は何時もキチンと出來てゐた。そしてわざとらしい點は微塵もなかつた。先生御在任當時は配屬將校が配置されて數年後の時で未だ教育者側も軍部側も相當研究の時代であつた。先生は教練教師の助教もなく唯お一人で隨分お骨が折れたことゝ思はれたに拘らず決して一回も不足を申されなかつた。寧ろ教練を學校訓育に役立たそうと御苦心され、學校自身の仕事まで買つて出て下された。

私共は陸軍少佐の地位の方にこんなことまでして頂いては濟まないと思ふことが時々あつた。學校側の依賴を何時もニコ〳〵してハイ〳〵と引受けられた寛容な態度に今更乍ら頭が下り、お慕はしさが增す許りである。

山崎先生が我校にお出になつたことは本校の限りない名譽であり、絶大なる生きた御教訓である。私共職員生徒は申すに及ばず卒業生一同も悉く山崎先生の心を心とし率先君國に酬ゆる一大覺悟を痛感し居る次第であります。（終）

ビルマ便り

ビルマ軍政監部
瀧澤芳樹

○

來月は暑い次月は尚暑いと云ひ乍らとう〳〵○月になつて仕舞つたがさつぱり暑くならない、これはどうも變だと皆で面を合はせる。東京で賣つて居る本なんか怪しいものだ、それ共本なんか書かうと云ふ人は大概年寄が多いから骨身にこたへたのでばないかなどゝと云ふ。同窓生諸兄ビルマの暑さなぞと云ふものは例へたはごとにしろ小生をして斯樣に書かしめる程度で別段特筆するには當らない但し軍隊は別であるが平時の勞働なら恐るゝに足らず。病氣にしても醫者が見れば病原の巢の樣であらうが生活は細菌學とは別で現に同窓四人ピンピンして居る日本人程度の種々な知識があれば何でもない。唯印度人の眞似やビルマ人の眞似をして生水を飲んだり（酔醒の時が危い）運振りをすると命取になる。熱帶醫學とでも云ふのを一册讀むだら來る時は置いて來てよい。その代りにサントリーの一本も賴む。

○

田村朝三君！ヒマラヤは近いぞ！。皇軍の前線は既にヒマラヤを望んで居る。ビルマの山はうつかり登れない。來た當時は氣付かなかつたが最近雨季が近付いて來るに連れ木の枝、草の蔭に巣喰つて居る害虫類は實に多い、これではうつかり山登りは出來ないと思つた。もつともこの所からは山は遠い。アラカン山脈にしろシャンステートにしろ何方も汽車で十時間は行かなくてはならない、それに今は山登りの事など言つて居る時期ではなしとんでもない話なのであるが田村朝三君の事を考へたら思はずヒマラヤは近いと吹いて見たくなつた。そのヒマラヤも實は此所からさア五百粁位あるのかな。シャンステートは祖國の夢を見るのに良い、オバステートから善光寺平を見たあの山と平地の狀形がもつと雄大にそして限り無く續いて居ると思へば良く、松、櫻の類があつて目を樂しませる。流水も清澄で、ある所は上高地を想はせる。唯シャン高原の入口タジーから首都タウジー迄カロー以外の所で百三十哩の間人家を見ず人類に會はないとしても驚いては不可ない。この廣い地に名古屋市位の人間しか居ないのだから。

○

ビルマの服裝、これは僕達は一應研究の要があると思ふ。他の事より少し專門的だ。併し未だ早い。今は珍らしいが先でとても研究なぞは出來ない。

年中常夏の國であるから日本人の樣に衣類のストック二億萬枚なぞと云ふ理にはゆかぬ。上層階級を除いては一人三、四枚と云ふ所だらう。綿布が斷然多く使はれ絹物は遊休人と祭り用に當人が着用する程度。一日四、五回は水をかぶる、その上石鹼もろくに使はない洗濯をやる姫君の樣な絹なぞ一度でペシャンコである、併し人間は美を愛するから金に餘裕のある階級は絹を求める。上層階級と女を對象にして考へればその需要量も相當なものであらう。それに當地の人は絹に憧憬を以て居る、傳統かも知れない。それは絹の原産地が雲南ではないかと云ふ樣なことから思考出來る事で上ビルマは雲南のとなりである。絲條斑なぞを問題にする代物では無く强度と染色が商品として問題になる丈である。キザな奴が多いから金を多くやれば絹物を買ふ、併しそれでは共榮圏が成立しない。勞働が必要だから。

○

服裝と云へば女の事から始めるのが順序の樣だ。一體南方の女は何所でもそうであらうが早熟である。此所の女もその例に漏れない。ロンギーで表現されるその曲線は相當なものである。

そのロンギーと云ふのは差當り日本の腰卷で昔は前も割れて居たしヒモも付いて居た相であるが何時の世からか前は縫ひ合はされヒモはとれ現在の樣なエゲツないものになつて仕舞つたもので相だ。正確に云ふと女ものは幅が四四吋、長さが五呎五吋で男ものは幅四四吋、長さ六呎である別に裁斷とか仕立とか云ふ行程は不要で幅四四吋、周圍六呎内外の筒を作れば良い理。これを腰にはいてロンギーそのものを結ぶ。だから一日に何回となく結び直さないと落ちて仕舞ふ。何んでも良いやと云ふ連中はロンギーの上にバンドをしめる。女ものは四四吋の外に白布で四吋程の增幅をする、まだこれが何の爲めなのか判らない。そして上流の女はもう一枚下着とでも云ふもの（白地）をつける。

○

ロンギーの色はヤケニ派手である。男も女も同程度に原色が多い。見慣れゝば併し當時紙幣、債券等の文字をどうするかなどゝいふ異論もあつて、遂に保留となつたやうに記憶する。現要路の某大官が何やらの委員を辭したのも直接この問題ではないが同じ委員會だつたと思ふ。

ホッテントットの面だつて見分けがつくのだから今では別に意に介しないが良いとは思つて居ない。これにスマトラ、ジャワ方面の樣に落着いた所ではまあ習慣だからで濟むかも知れないが當地の樣に毎日戰爭の現實を味つて居る所では男が赤いロンギーなぞ着てノロ〳〵されたのではやり切れない。ロンギーをバンッに代へて氣合を掛ければ種々の仕事は二割や三割能率の擧がる事は受合ひだ。國破れて情緒を樂しむ樣になつてはお終ひだとつく〳〵思ふ。ロンギーやサロン（特に男の場合を云ふ）を南方の美や情緒の表現にして所謂南方紹介を得々とやる文藝報國會員や視察團員と稱する者共よ糞喰へだ。現地へ來て仕事をやつて見ろ徒らにビルマ人を滿足させ日本人の對戰認識を甘くする。（筆者は絲一九回）

表題の左書に就て

高畠生

會報第二十九號を落手して、解封匆々表題の左書きに變つたのが目につき、又々一言苦情を申込みたくなつた。毎度のことで氣がひけるが、此の際平素の持論を發表して、大方諸氏の賛否を問ひ、少くとも此の方面の關心を深めることは、强ち徒爾ではあるまいと思ふ。

×

編輯同人の謹告には、表題を何故左書きに改めたのか、理由が說明してない。が察する所昨年のどの頃だか、閣議で左書に決定したやうなことが新聞に出たので、それを國定の方針と誤解して順應し大いに新しいつもりでやつたことゝ思ふ

なつたやうに記憶する。現要路の某大官が何やらの委員を辭したのも直接この問題ではないが同じ委員會だつたと思ふ。

×

あの閣議以來、世間には從來より一層左書右書が混亂して了つて、殆ど收拾出來ない現狀である。官廳や翼賛會のポスター、さては出版物や藥の廣告などに何等の統一がない。

然らば左書と右書とは何れを可とするか。私は次のやうな意見を持つて居る。

(一)全紙面横書（活字印刷なら横組）の場合は左書に限る。

(二)全紙面縱書の場合でも左方から右方へ

行を進めるやうにするがよい。即ち、㈠と㈡の式にすれば、頁物はすべて左メクリとなる。

㈢前記㈠と㈡が併行して實行出來るやうになれば、横・縱・混・用の場合、問題は起らないが、現在のやうに縱書の行が右から左へ進む形式である限り、ヤハリ横書は右書とすべきである。

×

そこで右のやうな私の持論に從へば、今度表題を左書に改めたのは、改革したとは云へない。而かも石倉先生の圖案解說に從へば、「圖の斜線を以て割し縱刻線を施せるは大陸を表し、八紘一宇の理想よりする我が千曲會の聖光が東方より燦然として大東亞に明彩を投じつゝあるを表顯した」とある其の東方に亞の字が來て西方に東の字が來て了つた。あの名圖案がそれでもよいものか、石倉先生の御意見を伺ひたい。

×

試みに第二頁を檢討してみる。「隨筆」の二字は右横書、「戰の斷片」は左横書であつて、こゝにも不統一を露呈し、而かも本文（縱書）が右から左へ讀むことになつてゐるから、一印でもない限り、誰でも一應は「片斷の戰」と讀むことゝ思ふ。

編輯同人折角の苦心の結果ではあるが私の意見をもとゝして、大方の賛否を質したい。事小なるに似て然らず、必ずしも舊套になづむ必要はないが、長い間の傳統を變革するには、餘ほど愼重にすべきである。忙中敢て一文を寄せた所以である。（一八・七・一）

夏の歌

高原の子

一、夏が來た！
佐久高原に
太陽が
焰の矢をそゝげば
蜜蜂は陶醉的な
眞夏の歌を歌ひ
向日葵は熟い
昂奮した眞夏の
精氣を發散させる

二、土用が來た！
淺間嶽のその上に
白い入道雲が
むく〳〵むくと
河きいでて
千曲の水の面を
金色に輝く赫光が
ぎら〳〵ぎらと
照り返す

三、いつもの夏だ
變らぬ土用だ
あの白い入道雲は
この碧い河の水は
しかし、しかし今年は——
あの白い雲は
遙か南の空を眼に浮ばせ
この流れる水は
遠い北洋へ想をおしやる

四、あゝそこで
靜かに
決せられつゝあるもの
祖國の運命
嚴肅に賭されつゝあるもの
全東亞の興廢
あゝそれを思ふ時
私の身内を激しく過ぎるもの
果してそれは夏であるか？

（終）

科學點描（12）

汗

夏になると暑くなつて誰も汗をかく、此の汗は發汗を感じない時でも一日一立にも達する。汗の出る量は人により作業により差があるが暑い日に家の中で輕い仕事をしてゐる程度で一日に三立位を發汗し、日中輕い筋肉勞働をすると一日に六立にも及ぶ。最も多く出る時には一〇立から一五立も出る。體の部位による發汗は最多が前額部、胸部、背筋、腰部、手背、頰及腹など之れに次ぎ内股や腋の下等は少ない。内股や腋の下等が多く出る樣に感ずるのは汗が放散しないからである。又姿勢に就ては身體を横にしてゐると床に接する方は發汗少なく上方の方が多い。寢返りをすると汗の出る方が又上方へ移る。

（被服の本質より）

森田、鈴木兩君の御榮進

森田三郎君（絲四）は五月三十日、日本蠶絲利用開發會社常務取締役に又鈴木敎吾君（絲八）は四月三十日郡是工業會社取締役に選任された。實に御同慶に堪へない。近時大會社の設立に當つて重役陣に或は上層幹部に母校出身者の少なかつた事は遺憾であつた。未だ若いのだ是れからだと互に勵まし合つて來たのであつた。時到り國策會社蠶絲利用開發及び關西の雄郡是の二重役を獲た。それに先にトップを切つた片倉の有賀文雄君（絲一）を加へ三君の是からの御活動に依り愈々眞價は發揮され、後續部隊の健闘と相俟て陸續として榮進者の現はれるだらう事を確信し期待する所である。然しながら兩君今日の榮譽の影には平素の並々ならぬ御勉强のある事を見逃してはならない。森田君は三重出身家業製絲に從事し遲れて母校に學び卒業後直に芝川商店に入り紐育支店を開設し頭角を現はす、後蠶絲中央會參事となり敏腕を振ひ同會改組に當り退いて長野生絲共同理事横濱出張所長とし、て十年苦心經營、見事に難關突破、不動の基礎を確立した。恰も日本蠶絲統制會社の創立に際會し選ばれて横濱出張所長となり變革期に對處しつゝあつた所此度君の手腕力量が買はれたのだ、圓熟した好紳士ゴルフ、小鳥飼、讀書を趣味とし坦々たる内に機を見る敏、文字通り自力本願でありながら他人の世話をする、惡口を云はず長所を取つて「あれや良いぞ」と云ふ邊り日本人悉くあゝあつて欲しいと思ふ。

鈴木君は福島出身專檢をとつて之れ亦相當の年輩で母校に入學、論部委員になり長谷川茉を講師として講演會を開き三谷部長の眼を白黑させたり、半田孝海師を招いて蠶靈供養祭を行ひ供養塔を建てるなど學生として既に立派な足跡を殘した。卒業後福島縣是製絲の創立經營に參劃し東北帝大に學び母校講師を經て郡是製絲の本社に入り現に總務部長として敏腕を振ひ郡是工業と改稱飛躍するに際し拔擢されたのだ。酒も煙草も嗜まず物柔い態度で秀徹した論陣を張られる所その兩腑の良さと勉强振りとが窺はれる。

切に兩君の御健勝を祈る。（H）

年三回收穫し而も萎縮病を絶對に發生しない桑樹の上田式仕立方に就て

須田圭二

筆者は大正一三年八月長野縣下伊那郡松尾村番本館養蠶部に於て桑樹の二段刈仕立を見た。同所主任穗坂小牧氏の調査に依れば次の如くであつた。

上段は春蠶期に伐採するが幾分の枝を殘す亂枝、矮小枝は木の生育上殘す。夏蠶に下段を伐採するが幾分の枝は殘す。同時に上段の枝をまばらにすると秋迄には相當の枝が出來る。秋に上段の葉を摘みて下段の掻き芽を爲す。以上の如くすれば松尾村の土地として年千二百貫はとれる。但し大葉物に限る。尚ほその特點としては

一、樹の生理を害さぬ爲め萎縮病は絶對に發生しない。

二、普通の根刈は春蠶期に伐採してしまうから六、七月の候に於て空間の利用が更に出來て居ないがこの仕立方は空間の利用にまい。

次に缺點としては

一、鐵砲虫の害はあるが小さい害虫の被害は無い。多少の被害はあつても根刈伐採後に見る芽を喰はれる樣な心配は無い。

二、赤澁病の被害は多い。此の場合には或る時期に上下段全部を同時に伐採して尙ほ一葉も殘さぬ樣に採りて病原を除かねばならない。

三、上段の發育がより旺盛であるから下段を夏蠶期伐採の時には上段の枝を相當粗にして下段に樹力を增さしめ日光を當てしめねばならない。

以上の如くであつた。依つて筆者はこの報告を母校にもたらし川瀨惣次郎先生に報告した。川瀨先生は其の年から化學部附屬桑園に於て表土の混合を爲し直にこの研究に着手した。

二段刈仕立はその時の校長針塚長太郎氏に依りて上田式仕立と命名せられ、川瀨惣次郎氏（一）、遠藤保太郎氏並に樋口琢磨氏（二）、（三）に依りて記載されたが川瀨先生は大正十五年に東京帝大へ榮轉、樋口氏は昭和三年逝去せられ又穗坂氏は其後赤澁病蔓延の爲め枝の全伐採をし一先づ經過せるも近接桑園主の苦情もあり爲に二段刈を中止し永年に亘る觀察も出來なかつたとの事。然るに筆者はその後この研究を續行して今日に及んで居るが未だ一度も病患害に見舞はれた事も無い。

× ×

試驗の成績は此處には省略し其の結果のみを記せば次の如くである。

一、上田式仕立は中刈仕立又は根刈仕立に比し年收量が多い。

二、上田式仕立は中刈仕立又は根刈仕立に比し刈桑中全芽の割合が多い。

三、上田式仕立には中刈と高刈とを兼ぬるもの（之れを中高刈と命名す）と根刈と高刈とを兼ぬるもの（之れを根高刈と命名す）との二通りあるが根高刈の方成績可良である。尙ほ根刈は兼取苗を作る場合の如く稍々低植（株の高さを地平線位に切る）とするを可とし上段は一拳式とする方がよい。

四、上田式仕立を行ふべき桑樹の品種は枝の多い種類にして夏秋蠶兼用に適する品種を可とする。又樹勢の割合に上昇しない品種を可とする。十文字は尤も之れに適する。

五、上田式仕立の植付株數は根刈の半數又は三分の二を適當とする。之を仕立つるには先づ低植にせし根刈仕立を作り數年後根刈の樹形完成の後先づ眞直なる一本の枝條を殘し（支柱をたてるを可とする）他は春伐する。若し必要ならば其の翌年も春伐を爲し上段の樹形完成するに及び植付株數を半減すれば上田式仕立を完成する迄に一反歩當りの收穫量の減少を來さない。

六、上田式仕立は一時に全部を伐採せず桑樹の生理を害さないから萎縮病の發生が絶對に無い。從つて樹齡も長い。

七、上田式仕立の缺點は樹勢の上昇である。之は桑樹の性質で上田式を連年繰返すと下段の發條數が尠くなる傾向がある。故に之れを防ぐには時々樹勢の引下法を行ふ事が必要である。それには上段の伐採回數を多くする事である。

そこでウラ枯れ（冬期梢頭の枯れる事）で上部の發育の止まる十文字の如き品種はこの仕立方にば最もよく適する。

九、上田式仕立は春蠶期ば上段の葉を使用するから根刈仕立の葉質よりも品質良好で夏秋蠶期に春より發芽し居る下段の桑葉を使用するのであるから夏蠶專用仕立の桑葉に匹敵し其の葉質普通の根刈仕立の桑葉の品質よりも可良である。又秋蠶期には上段の葉は中刈仕立春秋兼用秋蠶用桑に匹敵する

十、多收穫を目的とする場合には施肥量や施肥の回數を多くする必要がある。然らば此の仕立方に依る時は普通の仕立方よりも一反歩當りの收量をずつと多くする事が出來ると信じて居る。

文獻

（一）川瀨惣次郎　蠶絲科學講演集　第一輯　三二九―三三〇　大正一五年七月

（二）樋口　琢磨　大日本蠶絲會報　三六卷　四二八號　昭和二年一〇月

（三）遠藤保太郎　樋口　琢磨　日本桑樹栽培論　三三〇―三三三　昭和四年二月

母校便り

福田文矢教授新任

去る五月二十四日付を以て母校絹紡織科に教授として福田先生が新任された。

同先生は廣島縣福山市の御出身で明治三十二年生れ、第六高等學校、京都帝大工學部機械科を卒業後廣島縣立福山高等女學校教諭を經て今日に至つたもので、母校に於ては專ら機械工學方面の學課を御擔當されることになつた。先生の深き御垂教を期待する次第である。

木村素衛博士講演

六月十八日母校に於ては日本文化講義として京都帝國大學教授文學博士木村素衛氏を招聘した。演題は「總力戰と愛國心」と題し二時間に亘り先生の造詣深き內容を以て聽講者に感銘を與へること頗る多大なるものがあつた。

田村海軍航空中尉來講

六月十九日霞ヶ浦海軍航空隊派遣の海軍豫備中尉田村倉由氏來校、最近南方から歸つたばかりの方とて淅新の南方事情を語られ現下航空戰の役割の重且大なることを强調し、學徒の蹶起を要望した。

檜垣農林事務官來校

六月二十一日、二十二日檜垣農林事務官來校し蠶絲政策の特別講義を實施した。

本會記事

本會日誌

六月七日　矢澤　登氏名譽の戰死を遂げらる、電報にて敬弔の意を表す

六月八日　岡部　康之氏逝去せらる、弔詞を呈す

六月十四日　中村　繁氏の告別式執行せらる、山口理事會葬す

六月十五日　日本出版會へ入會申込書送附す

六月十九日　宇都宮高農同窓會よりの照會に對し本會事業調回報す

六月二十五日　會報第二十九號發送す

六月二十六日　昭和十七年度支會交付金發送す

六月三十日　森本爲之助氏の告別式執行せらる、倉澤理事會葬す

石倉先生退職記念品贈呈

石倉先生退職記念品費金募集は當初からの豫定の如く去る四月末日を以て締切候得共其後猶申込の向ありしため特に之等も追加受付して其芳名と共に前月號に登載報告致置候。然る處其後に至るも猶申込有之ため、又更に左の如く追加受付致候間茲に御報告申上候

尙之等追加の分は取纏めて頃日先生に贈呈致候間併せて御承知願上候

記

金拾圓也　岡　泰助
金五圓也　小見　益男　垣内　源一
金參圓也　好士　泰造
右合計金貳拾參圓也
總合計金九百五拾七圓也

尙支出金は當初の報告通り變動無之ため差引記念品代は金九百八圓五拾錢と相成る譯に御座候

以上

會費領收（七月五日現在）

入會金納入者

金拾圓也　久保田哲二郎（紡三〇）
金五圓也　田代　毅（絲三七）

昭和十八年度會費金四圓也

入佐　一郎（蠶三）　小山　長雄（蠶三六）
角替　赳夫（絲二五）　今村與四郎（紡五）
湯原　諄（紡七）　久保田哲二郎（紡三〇）

昭和十七年度會費金四圓也

入佐　一郎（蠶三）　今村與四郎（紡五）
久保田哲二郎（紡三〇）

未納會費納入者

金貳拾圓也
（昭和三、四後期五、六年度會費）
新庄哲二郎（絲二〇）

叙任辭令

卒業生之部

地方技師　內田訓之亮
同　竹內　善吾

陞高等官六等（以上五月三十一日）

中野高等女學校教諭　金澤　勇

公立中等學校教諭ニ任ス、高等官七等待遇長野縣中野高等女學校教諭ニ補ス（五月二十九日）

公立實業學校教諭　峰村　壽命

六級俸當分千七百四拾圓下賜　同　浦山　藤吉

六級俸當分千七百拾圓下賜　同　水城　孝勇

八級俸下賜

公立高等女學校教諭　吉田　隆雄

九級俸下賜（以上三月三十一日）

任朝鮮總督府道技師、敍高等官三等　北澤　茂

同敍高等官五等　尾見　祐八

同高等官七等（以上六月十日）

長野縣技手　藤崎　鉗
志田傳次郎　後藤　仙彌
中村　由枝

任地方技師、敍高等官七等、十一級俸下賜長野縣勤務ヲ命ス（六月十一日）依願免本官（六月十二日）

岩手縣技手　若井　弘

任地方技師、敍高等官七等、十一級俸下賜岩手縣勤務ヲ命ス（六月十一日）

朝鮮公立實業學校長兼教諭　堀　忠太郎

八級俸下賜、補長淵公立農業學校長兼教諭（四月二十七日）

公立中等學校教諭　岸　善亮

年功加俸年額百九拾貳圓下賜（四月三十日）

志田傳次郎

敍從七位（六月十一日）

朝鮮產業技師　中村　由枝

九級俸下賜、黃海道產業技師ニ補ス（五月二十一日）

長野縣技手　藤本衞佐雄

任地方技師、敍高等官七等（六月二十五日）

本校辭令

任上田蠶絲專門學校助教授（六月十六日）

山崎　菅錄
白井　美明

講師ヲ囑託ス（七月一日）

副手　鐵塚　好作

願ニ依リ副手ヲ免ス（七月十二日）

訃報

戰死會員遺族より禮狀

故中村　繁氏　上田市松尾町　兄　中村　昌壽

故森本爲之助氏　福井市豊島町三十九番地　長男　森本　芳行

以上會葬に對する禮狀

故矢澤　登氏　下伊那郡鼎村切石　父　矢澤　岡郎

以上弔電に對する禮狀

朝鮮黃海道兼二浦邑日鐵東社宅八五　故古郡　友一氏　長男　古郡　秀一

以上有志弔慰金に對する禮狀

弔慰金報告（七月五日現在）

故唐澤正氏弔慰金

金五圓也　矢島　文男
右合計金五圓也
累計金參拾壹圓也

故北澤孝一氏弔慰金

金五圓也　若林　清
金貳圓也　川船　卓爾
右合計金拾貳圓也
累計金四拾四圓也

故瀧澤七郎氏弔慰金

金壹圓也　宮坂　收
右合計金貳圓也
累計金四拾四圓也

故井上正人氏弔慰金

金壹圓也　山田　次男
右合計金壹圓也
累計金四圓也

故松本直氏弔慰金

金壹圓也　青木　實造
右合計金貳圓也　藤井　聰夫
累計金七圓也

故蓮沼光治氏弔慰金
金五圓也　池田　俊郎
金參圓也　鈴木　正悟
金貳圓也　荒木　喬
石原滿洲夫
傳田靜夫
新野元治郎
町田　博
山岸　恒一
金壹圓也
右合計金貳拾七圓也
累計金參拾六圓也

故有問正久氏弔慰金
金五圓也　土屋　傳
金參圓也　瀧澤提伊千
金貳圓也　山田　次男
右合計金拾圓也
累計金參拾八圓也

故中村岩人氏弔慰金
金六圓也　山本友之亟
金五圓也　若林　清
金貳圓也　小山　惠治
右合計金拾參圓也
累計金拾參圓也

故原英三氏弔慰金
金五圓也　宮田鐵五郎
金參圓也　岡村　源一
右合計金八圓也
累計金拾圓也

故楠森定男氏弔慰金
金壹圓也　武井賴太郎
右合計金貳圓也
累計金壹圓也

故青木茂美氏弔慰金
金壹圓也　武井賴太郎
右合計金貳圓也
累計金貳圓也

故三原磊藏氏弔慰金
金貳圓也　市川　信一
金壹圓也　生天目久平
右合計金參圓也
累計金參圓也

故中村繁氏弔慰金
金貳圓也　宮坂　收
長倉　稔
市川　信一

金壹圓也　山本友之亟
右合計金七圓也
累計金七圓也

故岡部康之氏弔慰金
金五圓也　山口定次郎
右合計金五圓也
累計金五圓也

故加藤四郎氏弔慰金
金參圓也　矢村　正夫
右合計金參圓也
累計金參圓也

弔慰金募集

故原英三氏（絲十六）（蠶五）
故中村岩人氏（絲十五）（蠶廿六）
故有間正久氏（絲廿六）（蠶廿六）
故青木茂美氏（絲廿六）（蠶廿六）
故楠森定男氏（絲廿六）（蠶廿六）

右五氏分締切期日七月末日

故松井正次氏（絲十三）（蠶廿五）
故三原磊藏氏（蠶廿五）
故矢澤登氏（紡十六）
故岡之氏（蠶四）
故中村繁氏（蠶廿五）

右五氏分締切期日八月末日

故森本爲之助氏（蠶十七）
故關只氏（蠶廿三）
故加藤四郎氏（蠶廿九）
故吉岡道眞氏（絲七）
故向井係一氏（紡十二）

右五氏分締切期日九月末日

以上十五氏に對し弔意金を募集致します
右期日迄に取纏め御遺族へ贈呈致したいと思ひますから夫れに間に合ふ様振替口座東京四三三四一番へ各故人に對する弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。

昭和十八年七月

社團法人　千曲會

故中曾根長男氏遺兒養育資金受領報告（七月五日現在）

金拾圓也　貴志警太郎　石附　文吾
山崎　傳
金五圓也　若林　清
下村　繁吉
小見　益男
金四圓也　熊谷　秀逸
金參圓也　山内　弘毅
稻森　昇
金貳圓也　辻田　光雄
右合計金七拾七圓也
累計金壹千參拾參圓也

三原磊藏中尉散華

五月二十五日、「三原磊藏中尉散華」の見出を、二十六日の朝、朝日新聞の全國版でみた私は胸を衝かれる思ひがした。同姓同名と云ふ事もあると思つて急いで次に眼をうつせば南安曇郡豊科町と云ふ字と磊藏と云ふ滅多に無い名前に私は絶望した。學生時代から中島、岡宮の兩戰死者を出し、一昨年から今年にかけて中島（後）、瀧澤の二人を病氣で失ひ今亦續いて起る三原君の死は、私を悲みのどんぞこに陥入れた。

悲みの中に私は三原君の思ひ出を綴つて見やう。

三原君は學生時代養蠶實習は何時も私と一緒だつた。それで私は三原君をよく知つてゐる。三原君は明るい性格の持主で何時もニコニコしてゐた。豊な愛情の持主だつた。その愛情は生物に對しても現はれて、蠶の飼育は實に丁寧で上手だつた。又三原君は、語學に堪能で流暢なリーディングは常に私達の模範だつた。體はどちらかと云へばやせた方だつたが、劍道は頗る強く其の劍の早い事で高農蠶大會には大いに活躍したものだつた。

卒業して君は淵郡の農學校の先生になつた卒業した年に私達の級は、「二光」と云ふ級雜誌を出した。其の頃は戰爭も始つて間もない頃で、私達の大部分は軍隊に這入る事を約束されてゐた。君も甲種合格で其の中の一人として、二光誌に文をよせられて、其の中に「立派な青年將校の姿で得意になつて歸郷しお父さんや、お母さんに逢つたと思つたらそれは夢だつた」と云ふ様な事が書かれて有つた事を記憶してゐる。

それからもう五年の歳月が流れた。戰爭は益々深まつた。此の頃になつて、北に南に赫々の武勳を樹てられて、私達の同級生が一人二と歸つて來た。私は一人母校に居つて、同級生の口からつゝましく語り出されるいさをしを聽く事を最大の樂しみとして居た。三原君も又陸軍中尉の姿も勇しく母校を訪れ、私の前に現れて來る事を信じてゐた。その三原君は今はもう居ない。卒業の時上山田で離別の宴を張つてから三原君と私とは逢はない。

一度だけは君の元氣な軍服姿を見たかつた。

三原君は、私と同様昭和十四年一月軍隊に入隊した。學生時代から學問に、運動に秀でた君は、軍隊に於ても甲幹として豊橋の豫備士官學校に學ばれ、卒業するや直に北支に轉屬せられた。軍隊に於て君は嘗ての夢を實現せられて立派な將校となつた。學生時代に鍛へた劍道は益々腕の冴へを示し、師團の武道大會には常に審判官として選ばれ大いに活躍されたとの事である。

北支に轉戰する事三年、其の間君は數々の武勳を樹てられたが、殘念にもあまりの戰ひの激さに病魔に侵されて、昭和十七年十一月大阪陸軍病院に白衣の歸還をされた。本年一月宇都宮陸軍病院に轉屬となつた。戰場に於ては百萬の支那兵を敵として、負ける事を知らなかつた君も、病魔には遂に勝てず、五月二十五日遂に護國の御靈と化せられた。

君は死の直前迄「七生報國」を誓はれて、「俺は絶對に死なぬ」と言ひ通されて、傍に看護する人々を感動させられたとの事である。

そうだ、三原君は生きてゐる。君の英魂は永へに生きてゐる。生きて君は戰つてゐる。後に殘つた私達は君の英魂と共に戰ひ、この大東亞戰爭を勝ち拔くのだ。

昭和十八年六月

蠶室の一隅にて　矢野記

故森本爲之助君の思出

永田平

去る六月二十八日畏友森本爲之助君は遂に四十七歳を一期として永眠された。生者必滅は世の鐵則と云へ餘りにも惜しき限である。君は五月二日頃健康に稍異常を感ぜられ早速醫師の診斷を受けたる處肺炎の徴候ありとて以後數日其の治療を續けられたのであつたが病勢は悪化こそすれ快方に向ふ模様とて無かつたので、七日に到り別の醫師の診斷を受けたるに腸チブスと斷定され直ちに日赤病院へ入院加療を續けられたのであるが、最初の誤診は全く治療の上に暗影を投じ十六、七の兩日腸出血を見、又二十九日朝第三回目の出血あり此の時危篤の報を得たのであつた。早速三十日見舞の爲病院を訪れ病狀を伺ふに全く衰弱甚しく危期にあつたのであるが此處一兩日を維持すれば回復の見透しつくとのことであつた。其後危期も過ぎ漸次落付き關係の人々皆期な望を抱くに到つたのに、前回の危期より丁度一ケ月を隔てゝ突然訃報に接し全く意外の驚きであり悲しみであり轉た生命の儚なさを思はざるを得ない。

特に記すべきは君の病氣を廻つて同窓の先輩坂田氏を中心とする知友同窓等關係者の方々の並々ならぬ眞情を捧げられたことであつて、腸出血以來十數人の血を移輸血をなし看護手當等全く遺憾なくあらゆる人事を盡されたことは感銘一入深きものあり、此點英靈以て冥さるゝものと思ふ。顧れば君は昭和十一年二月和歌山縣へ長野縣へ赴任せられ、六ケ年半の間蠶業取締所支所長として、經濟部出張所長として最後に縣廳に在つて蠶絲業奬勵の任に就き、其の赴く處何れにても明敏なる頭腦と豊富なる體驗に依り遺憾無く手腕を振はれ、往くとして可ならざるは無く、其の在任地の人々より轉出を惜まれてありしことは君の人格の然らしむる處にして又當然と云ふ可きである。昨年八月福井縣蠶業取締所長として榮轉せられ愈々之から決戰下蠶絲業に付多年の蘊蓄を傾け縣下蠶絲行政の刷新を企圖せられんとしつつ其の抱負を實現せずに逝きしことは惜しみても餘りある次第である。

生前の君は事に當り周到綿密、又一面事に當りての見透し正確にして大局を誤らざるは常に敬服措く能はざる處、又人に接するに親切溫容以て之に當りたるは今更喋々を要さない次第にして、限り無く君の生前に於ける思出は盡きない。

追想の一端を記し君の靈に捧ぐ。

中村君追懷

會田生

養蠶科第二五回卒、中村繁君、六月十三日午前八時二十二分永眠せられた。運命はいつも隱れた遊戯を樂しむものである。

○

君は土田の生れである。性明快、慧敏にして着實、意志强固な情熱の持主であつた。家人に對しても、他人に對しても實に親切な、感じのいゝ人であつた。學生時代は「松尾町のアンチヤン」とか、痨軀なるが故に「雅眠蠶」とか呼ばれて居つたが、今は全て憶出の語り草となつてしまつた。

運動家にして卓球部主將として、ねばり强く、投球の正確、常に機先を制して相手に罅隙だも與へず、明快なる指揮統御と相俟つて母校卓球史上に不滅の功績を殘された。

入學以來自分とは酒を飲む機會も多く、又卓球部の一員として種々御世話になり、加ふるに在隊中は蠶絲業界の變遷を知らせてくれた君、今は亡く、自分の身邊の蕭條たるを如何せん。

君の「海濤天をつくところ」といふ大山元帥の歌を、もう一度聞きたい。

○

卒業後昭榮製絲新町工場に奉職せられ、蠶絲業を此の上もなく愛し、仕事に實に忠だつた君は、全身の情熱を傾注、寧日もなく東奔西走せられた。性來痨軀にして强健でなかつた體軀を酷使し、過ぎたのであらう。不幸病魔に犯かされて一昨秋歸鄉御療養の餘儀なきに至つた。

○

北支より歸還し、休暇を利用して君が病床を見舞つたのは五月八日であつた。とても喜んで

よく來てくれた、無事歸還おめでたう。

俺は駄目だ、皆んなより遲れてしまつた。

だが俺はこんな病氣には負けはしない。必ず癒るといふ自信を持つてゐる。なあに、此の位の病氣に負けてたまるものか。

と言つて居つた。自分は

弱いことを言ふな、自分は卒業して間もなく入隊し、今歸還した。全て白紙の狀態だ病氣療養も御奉公だ。氣永に養生し必ず癒つてくれ。

と慰めるより外彼に平和の心境を持たせてやるべき言葉もなかつた。餘り長いこと話をして昂奮させ、疲れさしてもいけないと思ひ、言ひたいことが山程ありながら

又來るから氣永に養生してくれ

と辭去しようとしたら

是非又來てくれ、待つてゐるから

と名殘惜しそうに、繰返し繰返し、言つて居つた。

○

彼の病狀と「又來るから」と言つた自分の言葉が氣にかゝつたが、五月末に召集解除となり、あれこれと雜務に追はれ、再び見舞ふ機會もなかつた。

六月十七日、中村君の兄さんより中村君逝去の訃報を受けた。言ひ樣のない悲しみに打ち込まれた。病氣に苦しみ拔いたであらうが微塵も顏に苦惱の色なく、再起の希望に燃えておつた君、又逢へると確信して言つた「又來る」の自分の言葉……。運命の惡戯を悲しむ。

○

十八日君が靈前に額づく。「又來るから」との約束を果し得なかつたことを心からお詫びした。

空諦寥廓繫居士位、靜かに立ち登る香に微かにゆらめくを覺え、香の煙は君の姿となつて消えて行く。何處迄登るのであらう。無限の寂寥の流れに包まれた。

○

君が臨終に際して、自分の爪の色を見、自分の命もこれまでと覺り、苦しい息の下から母親、兄姉の名を呼び恩を謝し、母校の諸先生、親類、友人の一人一人の名を呼びて、吳々もよろしくと申したる外

皆んな、さようなら

を告げ

大東亞戰爭の眞最中、御國の役にも立たず此の世を去るのは殘念だ。

と數度繰返し、明瞭に、言遺して歸らぬ旅に出てしまつたといふ。その崇高な、然かも壯烈なる最期は「天皇陛下萬歳」を絶叫しつつ皇國の花と散る第一線勇士の最期に、勝るとも劣らざる愛國の至誠の發露でなくして何んであらうか。

○

斯くして君は死んでしまつた。天は二十有餘年の生命しか與へなかつた。自然は人を其の進歩の途中に奪つて、その先をどうせよといふのであらうか。進歩の途上にある人の生命を奪つて、かけがへのない人格的進歩をそのまゝ挫折させようといふのであらうか。

○

兄さんの手紙に

「何んとかして再起させたいものと、あらゆる手段をいたしたつもりですが、天命と申しますか、十二日夜再び手術をせねばならぬ樣なことになり、衰弱の體は遂に翌朝までの力丈けであへなくなりました」

と。發病以來寢食を忘れて看護せられた肉親の方々の、哀愁の情、堪へ難きものあるは、御悔みの言葉さへない。

○

中村君は何人も脱れ得ぬ死の中に消えて行つたのである。それは欲で一杯になつた人達に圍まれて、心の愛なき寂莫の中に錦の褥に埋まつて死んで行く人の死よりも不幸であらうか。凡そ人に對する愛を知らず、徒らに浮かれ、徒らに興奮し、徒らに抗爭して生きた一生の後に、最後に心を托するところなき懊惱を以つて、此の世の息を引き取る人達の死よりも不幸であらうか。

○

中村君の靈よ、安らかに眠れ。我々は微力ながら、君の眠りのいやが上にも安らかなんことに努めるであらう。

○

あの痨軀の中村君の靈が、靜かに微笑みつつ何處かに生きてゐると信じたい。

岡部康之君の逝去を悼む

小林庸

岡部康之君遂に逝く、寔に痛惜の極みである。昭和十六年四月八日發病以來二年有餘、其の間如何に焦慮された事か、一時は恢方に向はせられたが再發、御家族の手厚い看護もその甲斐なく長恨の内に逝つた、君の心中を察する時千萬無量の感がある、廿有年血の滲む努力精進の結晶が將に完成せんとする秋に當り此の悲運、此の悲願、何たる痛恨事であらふ、君が一貫せる至誠は天に通じなかつたか、玲瓏玉の如き圓滿なる君の人格も佛果に惠まれなかつたか、せめて業績發表の出來得る迄も元氣でありたかつた。君との最後の面談は昨年七月二日であつた、當時君は意識も明朗であり確りしてゐて、此の體力で今日迄保つのは一に研究が心に懸つてゐる爲めであると自分で話されてゐた程で論文綴りを出されて繰返し語られてゐた。發病當日は恰も日本蠶絲學會の研究發表日であつて、君も日頃の研鑽を公表した日なので一層その感を深くする、發病直後も念頭を去らなかつたであらふ、切々な心情を次の如く述べてゐた。

○胃の壁を再生させる術なきやわが研究の來し方思ふ（一六、四、一一）

○何氣なく吐きしが意外臓腑あらかた出しかと思ふ（一六、四、七）（奥様の手紙には八日とあり）

五月の下旬になり、病狀を反省する様になつてから

○突如吐血血沽〻裳　醫卽刻宣〻胃潰瘍
恰似爛漫花濺淚　如何我研究將狂
（一六、五、三〇）

尙四月下旬より稍小康を得たのでその喜びの心境を

○わが患部噴火口の圖にさも似たり
休火山になれ！否な死火山になれ
（一六、四、二八）

○辷り込みセーフなれかし吾が命
素願遂ぐるその刹那まで（一六、四、二八）

○盛り上る程に盛りたる器をば
覆すごと吾は病みたり（一六、四、三〇）

○又も盛れ盛れ元氣の如く此の身體日日に癒えたり
（一六、四、三〇）

○蠶居三月病綿癒て　仰見一庭新霽天、
燕子呢喃沖滑景　誰知素願鐵心堅
（一六、五、三〇）

○一謝俗緣病恣癒　再親〻文獻興甚多
蠶絲研究千編内　創意創成有幾何
（一六、五、三〇）

嗚呼この鐵石の決意を以つても病魔に抗することが出來なかつた。否な遺憾至極の事は初診の胃潰瘍は誤診であつたか、十二月一日膿膜出血にて再び倒れ爾來病床に在りてとう〳〵五月三十一日永眠された。死の直前迄業績の事を語られたそうであるが科學に對する敢闘心の旺盛なる洵に皇軍將兵の殉忠報國の赤誠と何ら異る處がない、盛れ盛れ元氣と何たる悲壯の叫びではないか。

君は犀利な觀察力と生成止るなき創造的構想、そして之を具顯する意志と技術とを兼備した技術者であり科學者であつた。植物のホルモンに就いては既に業に大正七年頃より創意に君獨自の所謂假說を堅持してゐた。資性明朗濶達にして友情に篤く同窓の爲めには飽く迄つくすといふ上州魂があつた。又家庭では良き慈父であり、親に仕えて孝悌、休暇毎に老父を訪ねるを樂としてゐた。あの盛り上がる眞理の探究心と共に剛氣滿々たる「アンビシアス、ボイ」でもあつた。

「彼方見ようれしからずや明星の光輝き明けなんとす」とは大正八年君が埼玉の蠶業試驗場に入つた時の感であつた。お親父さんが典籍史文に造詣深い關係もあらうが君も亦高度の文化的修養をつまれ加之文想豊かにして麗文をものせられてゐたのは業知の事である。大正七年から全八年に掛けて本庄町にゐた時關根某と云ふ國士風の新聞記者長老の發刊してゐた「關八州」と謂ふ新聞に二人で毎回蠶桑評を投稿してゐたが、君が寸鐵克く人を刺すの文章は讀者の歡迎を受けたものである。俳句、漢詩、短歌、叙情事文等ゆく處可ならざるはなかつた、終りにその一、二を記して君を偲ぶよすがとしたい。

獨山人の軸を廻ぐつて僕との間に一挿話がある、眞僞は別として「屁をひつて尻をつぼめよ、毒食ふて皿をねぶる事勿れ、一寸先き暗と、思はゞ天道人を殺すべし」と云ふ文句があつた。大正八年僕が埼玉縣を轉出する時坐右ノ銘として贈られたものであるが昭和五年になり急にそれを見たいと云ふので他の正眞正銘の山人のと交換してくれとの事であつた、此の狂歌は二人の處世訓として常に話題となり愛誦してゐたものである。君は三十才そこ〳〵で既に死生觀に透徹してゐた明智光秀の辭世の詩と稱せらるゝ「順逆無二行、大道徹心源　五十五年夢　覺來歸一元」を坐右ノ銘とせられ所謂無行禪師の「透得此關乾坤獨步」の境地に入つてゐたと思ふ。

君が思出ではそれからそれと盡くる處がない、蠶絲業の一大革新期に君を失つた事は國家的にも大きな損失である、然し君のなされた業績は斯業に寄與すること多大のものであり、又今後も永く至寶として輝くであらう。又君が眞摯な學究的態度、高潔な人格は後輩を鼓舞振作し尊い垂範となり同人間に再生して厚生に資することと確信する。生死卽涅槃謹で君の冥福を祈る。（一八、七、一八）

遺稿

◇八十八夜（昭和四年五月卅一日付）

（一）一、二、三（ヒイ、フウ、ミイ）心せかるる
（二）とことはに心せかるる

ひねもす桑の葉を數へ吾れなれど
變らぬ眞理追ひ求め吾れにさゝやく

（三）彼芭蕉堤長し日永し鐘は熊谷寺

◇年頭感（昭和四年一月）

ことしこそ蛇の衣を脱ぐ樣に
美事彼方へ拔け出て見度い

◇旅行吟その他（昭和八年）

○谷に迫り巨岩あり嶂時雨
○湯にひたれば遠雷もして客無言なり
○朝立ちの名殘惜しむや夏霧の湯
○蛇好むてふ宿の娘見んと汗を拭く
○呼び合ふて兩岸に立つ星月夜
○まねけども紅葉の徑はるかなり
○虫の野に吟ずれば北斗輝くよ
○市惻布かれて春風や丘に幔幕が

◇祝開校廿五周年（昭和十年十一月）

松尾城頭擧祝艦　偉哉二十五星霜
萬人齊仰斯慈父　針塚專門學校長

◇奉祝皇紀二千六百年

皇紀二千六百年彌々聖業軍暉鮮
蠶正積發成根幹日東精神萬古傳

◇蠶桑ゴシップより（大正八年）

○伊太利に於ける蠶蠶の最盛地は彼のアルプス山下に展開せるロンバルジーの平原なり

○彼地今しも硝煙彈雨の裡に在り、我邦の其のロンバルヂイの大平原は云はずもがな赤城山下八州に浩々乎たる此の關東平原なりと云ふべし

○群馬に埼玉に濃く東京茨城千葉に漸く淡く然りと雖も過去十年……二十年其の當時の威望漸く西海に壓倒されんとす、愛知に岐阜に

○鎌倉幕府將に室町に移らんとすか、繁榮一番其の覇を再び刀水の畔に稱せん哉！

故加藤四郎君を偲びて

古平生

七月五日君急逝の悲報に接し、餘りの事に驚愕に堪へず、生者必滅會者定離とは古今を通じての生ある者に課せられし一眞實乍らもあの快活なりし君が朝露の消え行くが如く忽焉として此の世から委を消さんとは、誰か果してよく之を信ぜん。

昭和十六年十二月君母校を卒へるや、直ちに技手として職を東京府廳に奉じ、繊維需給のためよく盡瘁しをられたり。されど在學中既に過度の運動の爲病に襲はれし君の身は、激努の爲次第に衰弱し、ために昨秋一時歸省し保養につとむ。されど君職責上安々として居るに忍びず、昨年末再度上京しその職務を果さんとつとめたれども、その身之に應へず遂に辭職の止むなきに至る。爾來半歲、母校なる巢立ちしより一歲有半、君遂に不歸の客となる。嗚呼何たる悲運ぞ。

君よく運動に長じ、蹴球に、陸上競技に、スキーに常にその體軀を縱横に活躍せしめたり。昭和八年上田中學校に學ぶや君間もなく蹴球部に入る。君天賦の才あり、日ならずして熟達し三年生にして最早一流選手として先輩に伍して堂々活躍したり。以來君更に精進努力を怠らず、夏の炎天の下、或は秋の夕陽を浴び、眞田ケ丘に亂舞する君の長軀は恰も飛燕の如く、足並ます〳〵冴えて當時その妙技は近縣その比類なしとてその名を謳はれたり。

君性質快活亦極めて眞面目なりし、而も豊なる情味を有し接する人をして常に親しから

會員動靜

（七月十日現在）

白倉一男（現職）本校會計課兼庶務課
土屋平（現職）本校庶務課
峰村員一郎（甲府工場）託（住）長野縣小縣郡中塩田村字小島
小見益一男（甲府市高畑町、電話二〇五五）（住）仝上
黒木農夫（七月一四日病死）
森本爲之助（七、二八死亡）
川上與三郎（五）
堀川收（三）
宮入慶治（三）
駒井俊郎（三）
池田（三）
鈴木正一郎（三）
岡庭武治（三）
久保田不二男（三）
玉田城三郎（三）
丸山保夫（三）
芳谷富雄（三）
會田誠二（三）
堀江誠（三）
楠八重行雄（三）
村澤巧（三）
福田英彦（三）
宮澤芳雄（三）
小林敏夫（三）
赤津辰弘（三）
若井男（三）
兒玉來（三）
畠山茂忠太（三）
渡邊齊（三）
茅野清三郎（五）
武藤寛一（五）
福島喜藏（八）
小口伊祐（九）
山崎曾錄（九）
瀧澤芳樹（九）
本多懋（九）
高橋井白（三）
美明（三）
松浦彰義（三）
青木善次（三）
澄平（三）
多川春雄（三）
柳村若（三）
土屋芳樹（三）

本校會計課兼庶務課
本校庶務課
鐘紡託（住）長野縣小縣郡中塩田村字小島
甲府工場（甲府市高畑町、電話二〇五五）（住）仝上
七月一四日病死
關東局中等學校教諭、全州農業學校勤務
昭和一八、六、二八死亡
長野縣南安曇地方事務所兼長野縣蠶業取締所豊科支所（南安曇郡豊科町）
舊姓、角田（住）茨城縣西茨城郡岩瀬町
東京都牛込區市ヶ谷町一〇七宮入醫院
東部三八部隊
（勤）奉天省興農合作社聯合會（奉天市朝日區揚武街興亜會館内）
（住）奉天市大和區彌生町四七番地
山形縣酒田市秋田町八番地
滿洲梓蠶社宅一三號
二條通一七、安東支店產繭課（安東市紅岸通五二）（住）安東市旭日區北
（勤）從前通り（住）靜岡市外藤枝町市部
南洋起業、臺灣出張所（臺北市水道町六五）
（勤）從前通り（住）岐阜縣揖斐町七軒町
丸山（三）
召集解除（住）横濱市中區本郷町三ノ一一一
金澤市成瀬町三一越村方
日本蠶絲製造片倉工場（佐賀縣鳥栖町）
栃木縣蠶業取締所佐野支所長（栃木縣佐野市）
久留米第二陸軍豫備士官學校
西部第一七部隊見習士官（留）朝鮮咸鏡北道清津府福泉町一六
北支、甲一六四九部隊
陸軍輜重兵學校幹部候補生隊
日本副蠶絲統制ヲ退社（住）横濱市神奈川區三ッ澤中町四三
岩手縣繭檢定所（盛岡市北町）
日本原麻株式會社（東京都芝區濱松町三ノ五）
東亜金屬工業、土山工場（住）神戸市須磨區塩屋町二四五ノ一
三井物產天津支店、保定事務所長（中華民國河北省保定市唐家胡同二〇號）
中支、祭四六二九部隊
昭榮製絲、小山工場（栃木縣下都賀郡小山町）（住）小山町御殿町
大阪陸軍病院赤十字病院第七病棟（大阪市天王寺區筆ケ崎町）（通信先）群馬縣群馬郡金島村大字川島一六五三飯塚正信方福島組代
日本蠶絲製造株式會社（東京都京橋區京橋三ノ二片倉ビル内）（住）東京都日本橋區吳服橋二ノ五
本校養蠶科、助教授（住）上田市松尾町五、一九八
ビルマ派遣、ビルマ軍政監部
（勤）ナシ（住）新潟縣佐渡郡新穂村正明寺
本校製絲科講師
ビルマ派遣号六八二四部隊（留）群馬縣碓氷郡西横野村大字八城二一
七高橋與三郎
九州帝大農學部農藝化學科生物化學奥田教室（住）福岡市外新宮湊村
鐘淵實業株式會社高砂化學工場（兵庫縣加古郡高砂町）
南海派遣、夏、九八五三部隊（住）鹿兒島縣肝屬郡田代村麓
滿期除隊（住）
北支、八三二七部隊

しめたり。家にありては温和にして常に厚き孝養を盡す。職にありては勤勉よくその責務を果し衆望厚く、特に上下の者より良く敬愛されたり。

君未だ二十有四才なり。今後に期待する所又多かるべし。然るに君人生の半ばにして昇天す、嗚呼悲しき哉、痛恨極りなし。

茲に君ありし日の偉を偲び謹みて哀悼の意を表す。

嘆くば君以て瞑せられよ。（十八、七、十二）

編輯後記

本號には北邊の護り神として二千の部下と共に玉碎した山崎部隊長の人となりを田口氏に御執筆願つた、崇高なる人格の程がしのばれて思はず肅然たらしめる。大東亜戰は愈々決戰の様相を呈して來た。銃後は第一線の苦闘を感謝して一丸となつて頑張らう。

○

近頃有爲なる先輩の訃が次ぎ次ぎに到る、母校にとつても業界にとつても誠に惜き極みである。吾々は之等先輩の殘した功績を無にし且中絶してはならない、會員三千鐵の塊となつて其の後に續かう。

松崎滋（絲二）日綿實業、横濱支店（横濱市日本橋大通三四）
江崎勝（絲三〇）西部四八部隊
羽生英尚（絲三〇）東部五二部隊幹部候補生隊
武井登（絲三〇）北支、甲一六四九部隊幹部候補生隊
田爪正記（紡二）熊本陸軍教導學校
村島徹（紡二）三和興業株式會社（大阪市北區會根崎上二ノ四八共和ビル）（住）大阪府三島郡春日村中穂積九二
橋詰英雄（紡四）長野縣經濟部農政課、地方事務官
柴田久（紡一四）香川縣丸亀市上金倉町畑五三五塚本作太郎方
佐藤佳良（紡一六）横濱稅務署（横濱市中區野毛野）（住）横濱市中區御所山五一
小林龍太（紡一七）同興紡織、青島工場（中華民國青島市外）
内田浩（紡一〇）（留）岡山縣吉備郡眞金町一六九二
武井和夫（紡一〇）仙臺市茂市ケ坂二三古藤方
田中袈裟雄（紡一三）東部四八部隊
矢崎豊（化一）千葉陸軍防空學校

本號に又々高畠氏から御注意を頂いた、重ねての編輯者の黒星誠に申誠ない、今後繰返さない樣戒心したいと思ふ。

吾々は本誌を苦心して前線會員に送つてゐる、又要求の手紙も多數來てゐる。其れ程前線の會員は會の樣子を知りたがつてゐる、どうか慰問狀を出すと思つて會員に知らせたい樣な寄稿を御願ひする、そして三千會員が一人殘らず執筆下さることを希望する。

猛暑の砌り切に會員各位の御自愛と御健康を祈る。（七月二十二日記）

昭和十八年七月二十日印刷
昭和十八年七月廿五日發行（非賣品）
上田蠶絲專門學校内
編輯兼發行人　荻原清治
上田市原町五七九五
印刷人（中長二四〇）中澤二郎
上田市原町五七九五
印刷所　中澤印刷所
上田蠶絲專門學校内
發行所　法人　千曲會
電話上田四〇六番・六六一番
東京四三四一番
長野六三四二番
振替口座